

四条の七辻——幕末に描かれた或る京の名所——

熊谷 貴史



図1 『都名所百景』「四条の七辻」

佛教大学附属図書館所蔵

はじめに

幕末に出版された『都名所百景』(『都百景』^①)のなかに、「四条の七辻」(口絵・図1)と題した一景がある。京の名所として選定され、描かれた風景ながら、現在、我々が想起する京の名所には含まれない。果たして、どこを描いたものなのか、どのような名所なのか。本稿の目的は、その疑問を明らかにすることである。なお本稿の内容は、かつて筆者が担当した展覧会(後述)において、ごく部分的に示した見解を補完するものである。また近年、地理学の研究者を主体とする研究プロジェクトに、筆者は美術史学を専門とする立場から学際的に参画している。プロジェクトの課題は「視覚資料の空間表現」を検証することであり、本稿もその視点をもって議論に供したい。方法論としては美術史学におけるイコノロジー(図像解釈学)^④を念頭におく。

一、ディスプレイとマッピング

―『都名所百景』の展示記録と補遺―

①『都名所百景』の展示

まず本稿のきっかけとなった展示を振り返っておきたい。平成三〇年度、佛教大学宗教文化ミュージアムでは秋期特別展として「徳器の成就に努めて智光を常照す―佛教大学附属図書館所蔵品展―」を開催した。⁽⁵⁾ 佛教大学附属図書館は、当ミュージアムに先立つ大学の附置機関であり、大学の歴史と研究の蓄積にとまなう様々な分野の資料が所蔵されている。なかには貴重書に区分される利用制限のある資料も多い。かかる多様な性格の資料を展示するための枠組みとして、佛教大学の建学の理念になる「仏教・浄土宗」、そして大学や当ミュージアムの所在地である「京都」、という二つのテーマを設定した。⁽⁶⁾

『都名所百景』は、むろん「京都」に関する資料として選定したもので、幕末の京都の情景をヴィジュアルに印象させる効果的な展示品となる。ただし開催趣旨や展示スペースなどに照らし、一〇二枚（百景に前後半の目録を二枚含む）をすべて展示することとは適わない。また一〇二枚はいずれも「佛教大学図書館デジタルコレクション」⁽⁷⁾ において高精細のデジタル画像が公開されている。実物が具える風合いや魅力を味わう場として、展観を通じて鑑賞には一定の利があるものの、インターネット上での閲覧環境が整った本作品を、一〇二枚のうち一部を抜き出して展示するた

めには、何らかの付加的な視点を設けたい。そこで本展覧会では、できる限り他の資料と関連させ、随所に展示することとした。いくつかその例を挙げておこう。

「智恩院門前」（北水画）〔図2〕には、八坂・祇園社方面から（現在の円山公園付近を通過して）北へ抜ける人物が、知恩院三門前にさしかかる場面が描かれている。知恩院ではなく、知恩院の門前が主題であることに意外性があり、展示では「知恩院門前替地之事」⁽⁸⁾と併置した〔図3〕。同じケース内には「浄土宗総本山知恩院全景図（知恩院蔵版）」や『花洛細見図』の「知恩院」記載頁を合せて展示。なお現在、知恩院三門の傍らには「佛教大学建学之地」と刻まれた建学の碑が据えられており、知恩院山内源光院にはじまる佛教大学ゆかりの地として、本展覧会には意義深い。「黒谷金戒光明寺」（玉園画）〔図4〕は雪の降り積もる冬景色。向かって右側に描かれた宝形造の建物は旧経蔵（現納骨堂）⁽⁹⁾、石段を挟んで左側に鐘楼がみえ、石段上には本堂（御影堂）らしき



図2 『都名所百景』「智恩院門前」
佛教大学附属図書館所蔵



図3 展示風景（知恩院関係資料）



図4 『都名所百景』「黒谷金戒光明寺」 佛教大学附属図書館蔵

て左よりに傾斜する構図。その石段の傾斜に交差する樹木のラインが効果的だ。現在、石段付近は桜や楓が季節を彩る印象も

屋根がのぞく。建造物では旧経蔵が大きく捉えられているものの、同寺境内には偉観をほこる堂塔が他にも思いあたる。⁽¹⁰⁾ そのなかでこの絵の舞台は、本堂へ至る手前の石段周辺。京の名所を編む意図をもって、この景観を選定したところが興味深い。寺院という場において、石段は副次的ともいえる要素ながら、同寺の石段は京都を代表するロケーションのひとつ。いまなお諸種のメディアに頻出することに通じようか。石段上から京を見渡す眺望もよい。描かれた情景は、降雪のなか石段をあがる僧、手前を横切る参道には、頭巾をかぶり帯刀する人物ほか数名。賑々しい参詣や行楽とは趣きの異なる、もの静かな一場面である。従前、『都名所百景』には、制作時期をうかがわせる特定の出来事が見出せるとの指摘がある。⁽¹¹⁾ そのような眼でみれば、文久二年（一八六二）に京都守護職を任じられた会津藩主松平容保が本陣を置き、ひいては新選組発祥の地とも称される、幕末の金戒光明寺を彷彿とさせる一景といえるかもしれない。画面は斜側に捉えた石段が下段から上段へ向かって左よりに傾斜する構図。その石段の傾斜に交差する樹木のラインが効果的だ。現在、石段付近は桜や楓が季節を彩る印象も



図5 『都名所百景』「三条大橋比叡山春霞」 佛教大学附属図書館蔵

展示では「改正分間新撰京絵図」（文化八年（一八一））裏面の「京三條大橋ヨリ方角道法」と併置した。このほか、「宇治橋平等院望」（玉

あるが、描かれているのは松。『都名所図会』にも石段の両脇には松らしき樹木が数本みえる。同寺は昭和の早い時期に火災と再興を経ており、景観も幾分変化しているだろう。また特定の樹木などが由緒をとめない、名所的性格を帯びることがある。金戒光明寺では『都名所図会』や『京都坊目誌』などに記す「鑑掛松」が知られ、当地で法然上人に帰依した熊谷次郎直実にまつわる伝承をもつ。⁽¹²⁾ しかしその松は、本堂（御影堂）前にありこの絵の構図ではみえない。ひっそりとした雪景色のうちに、幾つもの見どころを伏せているかのような感覚がある。展覧会では、この絵を「熊谷入道直実書状」⁽¹³⁾とともに展示した。「三条大橋比叡山春霞」（北水画）⁽¹⁴⁾は、近景に三条大橋の高欄、その擬宝珠越しに遠景の比叡山を望む。東海道の西の発着点にあたる三条大橋は、京都というエリアを超えたイメージを付帯する一方、京都をめぐる基点としても認識され、近世刊行京都図の一画に三条大橋から各所への道程が記されるようになる。

園画)を絵双六の「善悪双六極楽道中図絵」に、「壬生寺狂言」(東居画)を『洛陽四十八所地藏霊場巡礼生記』の「一番 壬生寺縄目地藏」と合わせて展示。また他の資料との組み合わせではなく、当館に近接する観月の名所「広沢池」(東居画)、当館敷地内から望むことのできる愛宕山を描いた「愛宕山朝日峰」(玉園画)・「愛宕山日暮瀧」(東居写)などを含め、一部は展示替えを行いながら、およそ二〇枚を展示した。

なお「広沢池」では、画題には示されていないものの、周知のことのように観月の様子が描かれている。こうしてみると、常に均質な空間ではなく、集い行き交う人々、季節や時間帯などによって変質する有機的な場として、「名所」の表情、ある瞬間を、意外な構図で切り取った点に本作品の見どころがある。むしろ制作当時に流布していた名所絵類の影響も勘案されるが、それは応用力ともいえ、少なくとも一定の技術をもって果たされることといえよう。本稿の対象である「四条の七辻」(玉園画)も、同種的情景表現を看取することはできるものの、しかし名所としての実態が知られない。そこで展覧会では、対照的に誰もが知る名所「音羽山清水寺」(東居写)の雪景と並べ、さらに『都名所百景』の制作時期に近い文久三年(一八六三)刊の「平安京御絵図并二名所ひとり案内」と同じケースに展示した。

②参考地図の作製——「四条の七辻」のプロット変更——

先の展示にあたり、百景の位置を示す参考地図(図6)を作製

した。同様の地図は、すでに中川邦昭氏による『彩色木版画集都百景』(以下、中川〔一九九四〕¹⁶⁾)に収載されており、その成果に倣い、鑑賞の補助材料として提示したものである。百景のなかには「叡山より湖水を望」(北水画)や「祇園会宵飾」(玉園画)のように、地図上の一点に示しにくいものもあるが、便宜上、該当するエリア付近に任意のプロットを打った。また中川〔一九九四〕掲載図とはベースに用いた地図の縮尺や範囲が異なることから、プロットの方法や位置に若干相違があるものの、表示しようとしている地点は概ね共通する。ただ一景のみ、プロットする地点を意図的に変更した。それが「四条の七辻」である。

なお該当する絵は、中川〔一九九四〕において「四条新七辻」



図6 参考地図：筆者作図

として紹介されている。画題については、その後、本作品を論じる（あるいは紹介する）幾つかの媒体にあるように、扇形の題簽中央の一字を「新」ではなく「能」とみて、「四条の七辻」と読んでおくのが妥当であろう。本稿でも、論題に掲げたように画題は「四条の七辻」としておく。¹⁸

さて中川（一九九四）掲載図では、阪急京都線の河原町駅（京都河原町駅）付近、おそらく四条河原町の交差点辺りを想定してプロットされている。ただし、このプロットが推定であることも書中にうかがえる。すなわち、本文として記される各絵の解説、該当地点の基礎情報、各所の現状写真において、「四条の七辻」のみ該当地点を「不詳」とし、解説もそれを前提とする推測に留められている。その記述を確認しておこう。

室町期から江戸期にかけて、京都と諸国を結ぶために設けられた街道の出入り口が七つあり七口と呼ばれた。それらは時代とともに変化した¹⁹が、栗田口、東寺口、丹波口、清蔵口、鞍馬口、大原口、荒神口が代表的なものである。四条新七辻は、今では何処を指すのか全くわからない。江戸期の終わりごろは、四条という京都市街の中心部に至る辻道を指していたのであろうか。今ならさしずめ四条通り、河原町通り、木屋町通り、先斗町通り、西石垣通り、西木屋町通り、花遊小路辺りをいうのであろうか。

「七口」や「辻道」などのキーワードを提示しつつ、最後の一文では、現在の京都を代表する繁華街、四条河原町周辺に眼を向け、七つの大路小路を例示。また現状写真として、四条大橋から東を向いて南座を望む写真（夜景）を掲載している。あくまで推測の域をこえず、場所の特定ができない段階においては穏当な解説といえよう。確かに、京の名所を謳っているにも関わらず耳慣れない「四条の七辻」。他にも「宇治川出合下の米かし」（玉園画）¹⁹や「西高瀬紙屋川水門」（洛春翠画）のように、現在の我々からすれば、直ちに名所というイメージに結びつきにくい画題も幾つかある。そうした景観選定にあつて、四条通という京の主要な街路上にありながら、なお実態の捉えにくい「四条の七辻」とは、果たして如何なる場所なのだろうか。

先の参考地図を作製するにあたり、筆者は幾つかの理由をもって四条通のある地点に「四条の七辻」をプロットした。それは四条河原町や四条大橋ではない。しかし参考地図は展示にかかる補助的な資料であることから、部分的な事項については説明を省略していた。ところが観覧者のなかには、「四条の七辻」の場所（および中川（一九九四）掲載図からの変更）に関心を寄せた方もおり、何件かの問い合わせを頂いた。また後に、「佛教大学図書館デジタルコレクション」の機能拡充（マッピング）²⁰に際してその地点が反映されたことを受け、以下、プロットの根拠を示しつつ若干の補足を加えておきたいと思う。

二、ディスプレイション

―「四条の七辻」の図様と表現―

①全体観―遠景・雲・時間帯など―

描かれている内容を確認しよう〔口絵〕。右上には赤色の短冊形題簽に「都百景」、それが重なるように描かれた扇形題簽に「四条能七辻」（四条の七辻）の文字。扇形題簽には黄色の地に鳥（鶴あるいは雁か）の群れが橙色のシルエットで表されている。また左下には赤色の短冊形題簽に「玉園画」、その右傍にひと回り小さい黄色の短冊形題簽に「石和版」の文字。

画面は縦長の長方形で、縦（長辺）と横（短辺）はおおよそ四対三の比率。上部の約三分の一は、山のシルエットを主体とする遠景が表されている。画面の左寄りに山頂、右へ向かって幾つかのピークを経て、徐々に稜線が下降し麓付近に至る。京都の周囲をめぐる山々のなかでは、比較的高い山の印象がある。右寄りの山麓手前には、重層の建造物が数棟表されている。簡素な描写ながら入母屋造の屋根のようにみえ、寺院建築を思わせる。また山麓の奥側には、やや薄い色味で表した別の山がみえる。

この山景と、画面の約三分の二を占める市中の景観は、やや幅のある雲によって隔てられている。いわゆる「金雲／雲形」と呼ばれる技法に類し、『都名所百景』では「四条の七辻」以外にも、「愛宕山朝日峰」「伏見稻荷三ヶ峰」「雄徳山八幡宮」ほか数例に用いられている⁽²²⁾。この雲は、しばしば指摘されるように空間表現にお

いて大きな効果をもち、画面内で遠近の隔たりを埋めるモチーフである。また同種の技法としてやまと絵の文脈で特記される「すり霞」は、横長の形態を特徴とする絵巻物では場面転換の合間にも挿入される⁽²³⁾。すなわち空間的な隔たりのみならず、時間的な隔たりを接続する機能をもつ。

翻って本例の場合、雲の上部に紫のグラデーション、下部に緑のグラデーションが施されており、五色の雲を思わせる加飾的な感がある。上部に施された紫のグラデーションは、遠景の山並みが濃色のシルエットで表されていることと対応し、夕景／夜景を表象する色味のように映る。一方、下部の緑のグラデーションに接する市街の描写は、一見、日中のようにもみえるが、所々に提灯を持つ人物が確認できる。やはり日没に近い夕刻の情景であろう。とはいえ、遠景の明度とは表現上の差があり、雲の緑のグラデーションは市中のそれに応じた配色といつてよい。仮に遠景と近景で、わずかでも夕暮れの時差が反映されているとすれば、異なる時間帯の風景を同一画面に描きだす、時空間をつなぐモチーフとしてこの雲を捉えることもできようか。

②水辺の情景―河川・橋・納涼床など―

この絵の主題である市中の景観に眼を向けよう。求心的なモチーフ（景物）は、画面右側の半ばより、左下へ向かって斜めに描かれた河川（水路）。そして、その中ほどに架かる反橋（太鼓橋）である。この橋を斜め上から見下ろすような鳥瞰的なアングルで、

周囲の町並み、街路、行交う人々が描かれている。

河川の縁には石積（石垣）の護岸が造成され、その直線的な河道は、自然景ではない人工的な水路を思わせる。橋のたもとには水辺を眺める窓を設えた茶屋と思しき建物。床几でくつろぐ人物。野点傘を据えた床几の露店には多くの人々が集う。川端には水上に張りだした納涼床（川床）も設置され、近世京都のウォーターフロント、水辺で涼む夏の一場面が描き出されている。前述の雲に施された緑のグラデーションは、四季という時間サイクルのなかで、緑の映える夏景のイメージが投影されているのかもしれない。なお納涼床の脚が据えられている川面（川底）は他の部分より段状に高く、そこから橋の方へ落水する描写（橋脚の隙間にみえる落水）から推して、画面右側が上流のようにみえる。

本稿では、とくに画面左端の中ほどから右下がりに傾斜するように描かれた小河川に留意しておきたい。反橋が架かる主要河川の存在感に比して控えめながら、後述するように「七辻」という景観を捉えるうえで重要な景物である。換言すると、「四条の七辻」という名所は、河川が垂直方向（T字状）に近接するという特徴をそなえる。ただし小河川は主要河川と直結していないため、自然景としての本流・支流の関係ではない。

③鳥居（神社）／高札場

もうひとつ眼に留まる景物がある。対岸の町並み、角地に描かれた建物である。正面に鳥居を据えていることから神社関連の施

設とみられるが、一般的な社殿建築ではない。いわゆる京町屋風の奥行がある建物で、間口の狭い前面を開放する形態である。京の街中（辻々）に散見する小祠²⁴とも規模が異なり、強いていえば、いま四条寺町付近に所在する八坂神社御旅所のような雰囲気に近い。なお間口から覗くスペースはそれほど奥行をみせず、手前に供物を載せた三方が三基、上部には十二枚の板面が掲げられている。絵馬であろうか。²⁵あるいは鳥居越しでなければ、高札を彷彿とさせる板面群。多くの人々が行き交う主要な辻（交差点）は、高札場に相応しい立地ともいえる。そのような意識であれば、鳥居と袖垣の間に立つ屋根付きの柱が、そうした類の設備と解せようか。神社と高札場の組み合わせも不自然ではない。²⁶

この建物の固有性を考える手掛りとして、鳥居の左側に描かれたのぼり旗を確認しておきたい。三旒のうち赤と黄の二旒に記された文字（黄旗は裏側で反転した文字）は「七石大……」と読めそうである。鳥居上部をわたる笠木・島木に隠れる部分もあるが、赤旗の下部にみえる最後の一字は「神」か。とするならば、「七石大□神」となり、神社にかかる呼称として「七石大明神」と推測される。仮に最初の二文字が「七辻」であれば、画題に直結するメルマーク、あるいは場所の特性を冠した社となるが、二文字目は「辻」と読めない。このことから、景観全体とはいったん切り離して、建物固有の情報と捉えておきたい。とはいえ、画面右上と左下の題簽に通じる配色、また画題に含まれる「七」の文字がリンクする点で眼につくモチーフである。

三、イメージソース

―「四条河原夕涼」と「筋違八ツ小路」―

①京の名所「四条河原夕涼」

京の名所として描かれた「四条の七辻」。その地点を割り出すにあたり、外せない要素が幾つかある。大きな要件としては、画題が示す「四条通」沿いの「辻」（交差点）であること（「七辻」の意味を解く必要があるが、これについては後述する）。また、描かれている内容から「河川／橋」を主要な景物として含むことがあげられる。これらの条件とともに満たす地点はそれほど多くない。そのなかで第一に想起される候補地は、やはり京都を代表する河川、鴨川に架かる四条大橋付近であろうか。

近世、鴨川に架かる四条の橋は、三条や五条の大橋に比して小規模な板橋、あるいは本橋ではなく仮橋のような時期が長かったという⁽²⁷⁾。しかし周辺の四条河原には、祇園会の頃に納涼床が設けられるなどして、多くの人々が夕涼みに訪れていた⁽²⁸⁾。いまなお夏の風物詩として京都を代表する風景のひとつ、鴨川納涼床。まさに名所としての性格をそなえたスポットといつてよい。また、かつて四条河原付近は（高瀬川との関係で）中洲状の景観を呈したとみられる。この中洲状の部分にも多くの露店が並んだようである。その様子は『都名所百景』にも選定されている「四条河原夕す、み」のほか、諸資料にうかがえる。

例えば絵画資料では、広重画の署名をもつ『京都名所之内』「四

条河原夕涼」⁽²⁹⁾（図7）などがある。この絵は、近景の納涼床が明度の高い表現、中景の中洲や対岸には暮景に提灯や行灯の明かりが点じられ、遠景の山並みは淡いシルエットで表されている。橋は描かれていないが、四条通からの景色と考えれば、橋は画面右外に位置するだろう。この界限から望む山景は東山連峰、高い峰は比叡山とみられる。したがって鴨川の右岸（西側）、四条橋西詰付近の河原から北東方面を捉えた構図になる。留意されるのは、納涼床を設えた川辺の夕景であること、そして近景を多色で描き、遠景（山景）をシルエットで表す手法などが「四条の七辻」と共通する点である。

もう一例、同じ主題の資料として、『都名所図会』巻二の「四条河原夕涼」⁽³⁰⁾をみておきたい。この項目の挿絵（図8）は「四



図7 『京都名所之内』「四条河原夕涼」
国立国会図書館所蔵



図8 『都名所図会』「四条河原夕涼之跡」
国際日本文化研究センター所蔵

河原夕涼之鉢」と題され、鴨川右岸（西側）より中洲を挟んで左岸（東側）を捉えている。四条通は画面右下の橋（鴨川右岸から中洲に架かる橋）より対角の画面左上付近（霞に隠れた仲源寺Ⅱ眼疾地藏のあたり）へ斜めに延びる。四条河原を北西上方から南東を向いて、斜めに見下ろす鳥瞰的なアングルと構図である。画角や景物の密度が異なるものの、「四条の七辻」のアングルに近い。とくに中洲から左岸（東側）に架かる橋の周辺は、「四条の七辻」の構図とオーバーラップするだろう。現在の南座にあたる「芝居（小屋）」も、およそその配置として「四条の七辻」に描かれた「七石大明神」と呼応する。また彩色画ではないが、東山に昇る月の周囲や雲形／霞の縁回りに濃色が施され、夕景であることも表現されている。相似する構図、そして川辺の夕景という空間的・時間的な近似は、両者の間に何らかの影響関係があることを推測させる。加えてもう一カ所、それほど目立たないが、注目しておきたい景物が画き込まれている。画面左側の半ば付近、上部の祇園新地へ大和橋を経て鴨川左岸（東側）に注ぐ支流、白川である。主要河川に対して垂直（T字状）に接する小河川、これに近い景観構造が「四条の七辻」にもあった。細部に眼を凝らせば、石積（石垣）の護岸³²も眼に留まる。しかし「四条の七辻」では小河川が路上に表され、また主要河川と小河川は直結しない構造で描かれているため、厳密には一致しない。

翻って、中川（一九九四）において示された「四条の七辻」の解説（推定）は、こうした四条河原の景観・風俗・歴史を踏まえ

てのことと推察される。夕景の表現であることを読み解き、現状写真として、四条大橋から東（南東）を向いて南座を望む夜景のカットを提示されたことも示唆に富む。あたかも情況証拠が積み重なるように、「四条河原夕涼」と「四条の七辻」に類似点を見出せることは、やはり何らかの関係があることを想定すべきだろう。ともすれば京都に土地勘³³があるほど、両景のイメージが結びつくのではないか。一方、確定的な情報に欠けることから、「四条の七辻」の該当地点を「不詳」とした中川（一九九四）の態度は堅実であり、あえて再考の余地を残した意図も汲まなければならない。

視野を広げれば、日本文化には「見立て³⁴」という特徴的な表現技法がある。あるいは和歌の世界では、「本歌取り」の手法が発達した。そのような概念を名所絵に敷衍すれば、「四条河原夕涼」は「四条の七辻」の本歌に相当する、イメージソースのひとつといえそうである。しかし鑑賞の際、イメージソースの内容や情報に強く依拠するならば、それはミスリードとして作用する可能性を孕むだろう。

②江戸の名所「筋違ハツ小路」

さて、「四条河原夕涼」という情景・図絵に求められる視覚的なイメージソースとは別に、「四条の七辻」という画題、就中「七辻」という景観選定に結びつく、意味的なイメージソース（の可能性）に眼を向けたい。それは京都ではなく、江戸の名所「八ツ

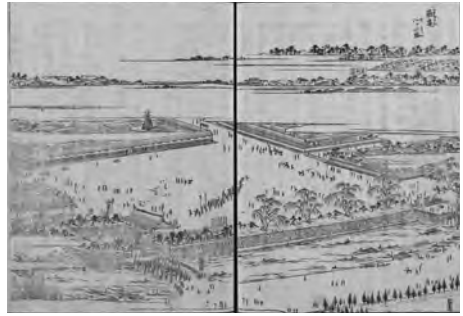


図9 『江戸名所図会』「筋違八ッ小路」
国立国会図書館蔵

をもつ広場のような景観であった。

『江戸名所図会』の挿絵「筋違八ッ小路」⁽³⁶⁾は、神田川に架かる筋違橋の北東側上方から、鳥瞰的に八ッ小路を斜めに見下ろすアングルと構図である。方形状の広小路外周に大小の路(門・橋)が設けられ、人々が往来する。人々が集う名所、あるいは名所に訪れる、というあり方の前に、元来、交通の要所として多くの人が行き交う場。ここを名所たらしめているのは、風光明媚な景勝地、著名な寺社や祭礼、古跡・霊跡といった類の性格ではなく、中山道を含む八つの路が接するという人工的な景観構造である。八ッ小路の全体観を捉えたこの挿絵は、各路との接点を画面に収めようとする意図がうかがえ、名所の意味を説明的に表したものである。

小路」である。この場所は、江戸城外郭の城門のひとつ「筋違見附」の内側にあたり、「見附の内側は広小路で、八方に道が通じていたから八ッ小路の辻とか八辻が原・八ッ口などと称された」(『国史大辞典』「筋違見附」項)⁽³⁵⁾という。火災延焼を防ぐための広小路であり、図絵にうかがえるように、交差点(多差路)というよりも、八カ所の出入口



図10 『名所江戸百景』「筋違内八ッ小路」 国立国会図書館蔵

『江戸名所図会』よりやや時期の下る『名所江戸百景』の「筋違内八ッ小路」⁽³⁷⁾は、八ッ小路内で北西を向き、昌平

橋と淡路坂の二方面へ向かう一角を鳥瞰的なアングルで捉えている。視線の水平レベルは、画面右上(題簽下)の高台に描かれた建造物にあう。この方向には聖堂(湯島聖堂)、神田明神、やや離れて湯島天神などが位置するが、描き込まれているのは神田明神。眺望のよい境内東側(本郷台地東縁)に構えられた茶店がみえ、その場所からの眺めを描いた同百景中の「神田明神曙之景」と呼応する。江戸城の外濠にあたる神田川の土手越しに、江戸総鎮守として崇敬を受けたという神田明神を望む構図は、ある種のコンセプトと実景に近い描写を思わせる反面、八つの路に接する同所の特徴的な景観構造を表象していない。総じて『名所江戸百景』は、各所の説明的な描写を主眼とせず、意外な場面設定やモチーフ、大胆な構図に面白さがある。転じてこのことは、必ずしも各所の説明を必要としない、名所としての認知度の高さを示しているよう。

立ち返って「四条の七辻」を含む『都名所百景』は、先行する『名所江戸百景』の影響を受けて出版されたことが指摘されてい

る。ときに大胆な構図を用い、あるいは各所の隠れた表情を切り取り、ビューポイントを提示するような表現感覚は、まさに『名所江戸百景』のオマージュといつてよい。例えば東海道五十三次の両端、『名所江戸百景』『日本橋江戸ばし』と『都名所百景』『三条大橋比叡山春霞』が意味上の対をなし、ともに橋の擬宝珠・高欄に接近した構図中に遠望を描き出すことは、その関係を如実に示している。敷衍して、景観の選定(画題の設定)においても、江戸の名所観や名所絵に取材し、京の名所を再解釈／再構築した景観(画題)を含む可能性があるだろう。すなわち「筋違八ッ小路」にインスパイアされ、複数の路に接するという景観構造を、京の市に見出したのが「四条の七辻」だったのではないか。本稿では、「四条の七辻」の視覚的なイメージソースと想定される「四条河原夕涼」に対して、「筋違八ッ小路」を意味上のイメージソースと位置づけたい。

四、イコノロジー (あるいはトポロジー)

—「四条の七辻」とは何か?—

①「京の七口」と「七道の辻」

京の名所として描かれながら、実態の掴めない「四条の七辻」。ここまで確認した内容を念頭に置きつつ、やや視点を变えて考察を進めよう。江戸の名所「八ッ小路」の景観構造を擬えたと思われる「七辻」が、故なく四条通に結びつけられたとは思われな

い。「七(辻)」という数にも、ある種の独自性が窺われる。果たして「四条の七辻」とは、実景として、あるいは景観構造として七つの路に接するのだろうか。

この点、先学も触れた「京の七口」は、京域の周囲に点在する街道口の総称であり、特定の地点(辻)に集約されない。また「七口」にあたる地点が、年代や諸資料によって必ずしも一定でないことも考慮されよう。ところが、留意すべき用語が存在する。『都名所図会』の「廻地藏」³⁸、その所在地にまつわる「七道の辻」である。ただし解説文は、「廻地藏は諸羽の東にあり、小野篁の作にして七道の辻の其一ツなり(後略)」といい、複数の地点の総称であることを明示している。いわゆる「京の六地藏巡り」の祖形として、「京の七口」にそれぞれ六体の地藏尊を祀ったことに由来し、したがって「七道の辻」は概ね「京の七口」に相当する。

少しく想像を加えるならば、地藏信仰から連想される「六道の辻」の語感が、「七道の辻」という呼称に影響を及ぼした可能性も推測されようか。むしろ「六道」は、仏教思想において衆生が輪廻転生するという六つ世界を意味する。この義の「六道の辻」は、実景的な六差路ではなく、いわば現世と他界の接点と解され、いまの京都市東山区轆轤町に所在する「六道の辻」のように、ある特定の地点を指して用いることが可能な語である。「七道の辻」(京の七口)が特定の地点を示す語ではないことと対照的であるが、本稿にとっては、ともに景観構造としての多差路を要件としない点が留意される。

しかし仮に、「四条の七辻」という一地点が、観念的に「七道の辻」(京の七口)の交点を擬えているとすれば、描かれている街路の延長に各街道口への道筋がイメージされているかもしれない。その場合、京中の要所、あるいは交通の要所という性格を付帯する場所であれば、七つの路に接していない景観であっても、延長線上で分岐する道筋を想定することで一応は成立する。しかしこの仮定を推し進めれば、例えば近世の京都図類において、京都各所への道程を示す起点として設定された「一条札辻」、「三条大橋」なども候補となりそうである。とすれば、描かれた「四条通」沿いの景観は、他の場所ではなく、そこであるべき理由があったと考えたい。

②「七辻」のカタチ—景観構造の再検討—

いま一度、「四条の七辻」に描かれた景観を確認しよう。先にディスプレイスキップシヨンの過程でおおよその特徴を把握したが、次いで示した視覚的なイメージソース、「四条河原夕涼」とは差異も認められる。その差異は「四条河原(界限)」との同定を躊躇させる要素といえ、反面、「四条の七辻」固有の要素ともいえる。そこで、あらためて注目したいのは、主要河川に対して小河川が垂直(T字状)に近接する景観構造である。この小河川は、幅の広い街路の中央帯に位置している——が、しかし焦点を変えると、小河川が二つの路に挟まれている、と捉えることもできる。同様の理屈でこの景観を見渡せば、主要河川を挟む兩岸の側道も眼につく。



図11 『都名所百景』「四条の七辻」(部分・加工)
佛教大学附属図書館所蔵

ところで「七辻」という景観構造は、各々固有の呼称をもつような、別個の七路に接する必要はない。例えば四条河原町(四条通と河原町通)の交差点のように、二つの路が交差すれば四辻を形成する。多差路においても事情は同じで、交点/辻を貫通する路は、その交点/辻を基準とすれば二方向への接点をもつ。「辻」の語を用いた必然性がここにあるのだろう。

「四条の七辻」の図様のうち、最も求心的な景物は反橋である。ここを基準とすれば、主要河川の両側道がそれぞれ上流側と下流側へ向かう四つの接点、小河川の両側道へ向かう二つの接点、そして反橋から画面右下の方へ至る一路をあわせ、計七つの路に接することになる(図11)。したがって、景観構造として「七辻」という条件を満たしている、といつてよい。なお垂直に近接する

二河川と、それらの側道が「七辻」の成立根拠として作用するならば、該地点の同定においてもその特徴を等閑視することはできない。そしてこのことは、実景や諸資料に照らし、「四条の七辻」が「四条河原(界限)」には該当しないことを意味する。



図12 「改正京町御絵図細見大成」(部分) 西尾市岩瀬文庫所蔵

③ 四条通沿いの河川

いうまでもなく四条通は、平安京の造営にともなう四条大路に重なり、現在は八坂神社を東端に、西端の松尾大社までを結ぶ幹線道路を指す。近代、『京都坊目誌』は「東は東山通八坂神社に起り、西は大宮西方に至り、葛野郡朱雀野村字壬生に接す(後略)」³⁹⁾といい、近世の各種京都図においても、西側は概ね壬生界隈までの描写をみることができる。したがって、市中の景観とみられる「四条の七辻」の位置は、壬生界隈を西限とする四条通沿いと考えてよい。試みに『都名所百景』の出版時期と大きく隔たらない「改正京町御絵図細見大成」(図12)⁴⁰⁾に眼を向ければ、これまでに確認した事項に照らし、極めて蓋然性の高い地点が見出される。幾つかの要所と比較しながら、その地点を確認しよう。

祇園社から西進しながら河川(水路)のある地点をひろくと、まず鴨川と高瀬川を通過する。この界限は、前述の通りイメージソースとして留意されるが、該当地点ではない。やや西へ移動すると寺町付近で水路を越える。『都名所図会』の挿絵「祇園御旅所 四条道場」⁴¹⁾の画面下部にみえる、かつての中川(京極川)である。⁴²⁾『都名所図会』解説冒頭に「四条京極の辻にあり」と記す祇園御旅所は、「四条

の七辻」に描き込まれた鳥居付設の建物を思い起こさせるが、周辺に垂直に近接する河川は存在せず、「七辻」を形成しないため、この辻も該当しない。

西進して、近代に埋め立てられたという西洞院川を越える。中世以降、応仁の乱を経て、京の都市構造が上京・下京という枠組みを形成するなかで、下京の中心的な場所がこの界限にあった。ひと筋東の新町通、四条新町の交差点は「四条町ノ辻」⁴³⁾と特記されることもある商業地区の要地。友禅染業と関わりの深い、西洞院川の風情も想像に難くない。また西洞院通と新町通の間には、四条通から綾小路通へ抜ける「膏薬辻子」がある。そしてこの小道には、「神田明神」がある。『京雀』に「かうやくの辻子又此町の南にて行當神田明神の社有」とみえ、近世のはやい時期より存在していたことが知られる。前述の『名所江戸百景』「筋違内八ッ小路」に神田明神が描かれていたことを思い起こせば、あるいはこの界限を含む見立てがあったのか、との可能性を探りたくなるが、やはり垂直に近接する河川が見出せず「四条の七辻」の景観には当てはまらない。

さらに西へ進むと、四条堀川の交差点へ至る。現在、この付近は暗渠となり、景観上に現れない堀川。⁴⁴⁾平安京造営時に整備された人工河川で、かつて地上に表出していた河道が、近世の京都図類には明確に表されている。注目されるのは、堀川以西の四条通上に表された小河川、堀川と垂直の関係にある四条川である。この景観構造は、先に確認した「七辻」のカタチに極めて近く、「四



図13 「都記」(部分) 京都大学附属図書館所蔵



図14 「平安城東西南北町并之図」(部分) 京都大学附属図書館所蔵



図15 「新板平安城東西南北町并洛外之図」(部分) 京都大学附属図書館所蔵



図16 「新撰増補京大絵図」(部分) 国立国会図書館所蔵

条の七辻」に該当しうる有力な地点といってよい。ただし参照した「改正京町御絵図細見大成」では、堀川に架かる橋の北側に四条川が接しているようにみえ、二つの河川が隔たるように描かれた「四条の七辻」の景観構造とは、直ちに同定することはできない。どの程度(精度)の情報を表す意図があったのか、あるいは、どの程度(精度)の情報を表す技術があったのか。折々の製図技術、制作意図の相違などを勘案する必要がある。そこで、時期の異なる例を含め、幾つかの近世京都図を参照しておきたい。

④ 四条堀川のカタチ―図示と描写―

近世初期、寛永元年(同三年頃「一六二四(一六)」)とされる「都記」(寛永平安町古図)では、図の範囲に収まる河川が、堀川を含めすべて表されていない(図13⁴⁶)。むしろ河川が存在しなかったわけではなく、その情報を示す意図がなかったことによる、省略とみてよい。「平安城東西南北町并之図」には、鴨川に架かる橋と堀川が看取され、とくに堀川には水の流れを示す波線が表されている(図14⁴⁷)。図中、周囲に配された洛外名所の絵画的な表現に対し、洛中では唯一ともいえる絵画的表現であり、都市構造として特記すべき要素であったことが窺える。しかし、西洞院川や四条川などは表されていない。

承応三年(一六五四)の「新板平安城東西南北町并洛外之図」では、河川が図中の主要な構成要素として顕在化し、四条通は鴨川・高瀬川・西洞院川・堀川を横切る(図15⁴⁸)。そして四条堀川



図 17 「増補再板京大絵図」(部分) 佛教大学附属図書館所蔵

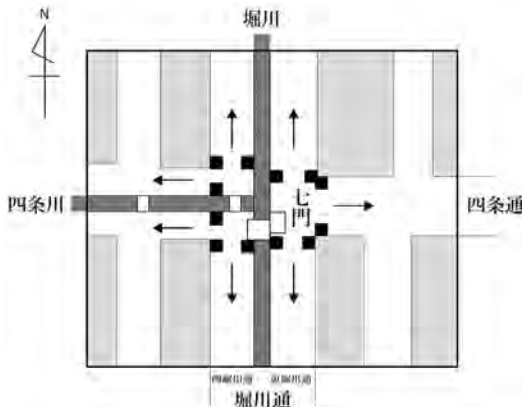


図 17-3 七門：筆者作図



図 17-2 七門：同上（四条堀川付近部分拡大）

から四条大宮の間には、四条通の中央帯に堀川と垂直に近接する四条川が描き込まれており、しかも堀川とは直結していない。すなわち本図には、「四条の七辻」の描写と一致する景観構造が図示されている。

その後、近世を通じて出版された諸種の京都図に、この四条川は散見する。しかしその表現は様ではなく、例えば貞享三年（一六八六）林氏吉永刊の「新撰増補京大絵図」では、四条川は堀川と直結せず、北側の路肩近く、細い川筋が大宮通を越えて西側へ伸びている（図16⁴⁹）。刊行京都図のなかで重要な位置を占める林吉永版の京大絵図は、基本となる数点の図とその修正版からなること、幾つかのタイプに分類されることが指摘されている。⁵⁰そのうち寛保元年（一七四一）刊の「増補再板京大絵図」（乾坤二舗⁵¹）は、従前の図と様相を一変し、本稿にとって重要な情報を含んでいる（本稿掲載の佛教大学附属図書館所蔵の図は所司代屋敷に「安部伊豫守」とあり宝暦一〇〇明和元年（一七六〇〜六四）頃の修正版と推定される）。

この「増補再板京大絵図」は林吉永版京大絵図の集大成的な段階にあたり、乾坤二舗という南北に二分割された大画面に、京の周辺域を含む多くの地誌情報が盛り込まれている。先行の図に比して縮尺も大きい。その傾向に一致することといえようか、四条堀川にも付加的な情報、「七門」(図17)の文字と図示が認められる。先に検討した「七辻」の景観構造は、河川の両側道を個別に捉え、本図でいえば堀川沿い北向き（上流側）に二路、南向き（下流側）

に二路、四条川沿い西向きに二路、そして河川のない四条通東向きの一路を合せた計七路である。「七門」はその捉え方に一致し、七つの路／門の門柱にあたる部分を「■」で表したものである。ある時期、この場所には、実際の構造物として門が設置されていたのだろうか。いまその実状を議論する用意はないが、「増補再板京大絵図」の制作時において、七つの路に接する四条堀川の景観構造を、特記すべき事柄として認識していたことは注目されよう。

「四条の七辻」が四条堀川に該当するならば、構図は南東から北西を向いて、堀川に架かる橋を斜め上から鳥瞰的に見おろすアングル、堀川は画面右側が上流となる。地点を同定すること、堀川の流れの向きを客観的に説明することができるが、画面を斜めにはしる河道は、表現上のこととして鑑賞者に右から左へのベクトルを印象させる。もしこの構図で流れが逆であった場合、上部（奥）に位置する山景とも相まって、少なからず違和感を生じさせるだろう。視覚的なイメージソースとみられる『都名所図会』「四条河原夕涼」は、方角と川の流れが「四条の七辻」とは逆になるものの、河道が画面を水平に横切るように表されているため、とくに不自然さはない。その意味で「四条の七辻」は、四条堀川であることに起因する構図が設定され、縦を長辺とする画面にその特徴的な景観をうまく収めている。画面上部の遠景は、京の北西に位置する愛宕山に連なる山々、山麓の寺院は御室周辺の地域であろうか。

ところで「増補再板京大絵図」に表された堀川と四条川は、「七門」が囲む枠内で、垂直に接しているようにみえる。また四条堀川に架かる橋は上・下流の橋々と描写が異なり、判然としないものの、堀川と四条川が接するやや南に位置するとみられる。他の絵図では、四条川が堀川の手前で斜めに北上し、橋の北側で堀川に接する例もある⁽⁵³⁾。「四条の七辻」における描写も、反橋から西へ向かう道筋は四条川の南側道に通じており、先の関係性と一致。ただし堀川と四条川の関係は、分断しているように描かれている。ときに直結しているように図示され、ときに分断されているようにも表された堀川と四条川の関係は、井堰に類する景観構造⁽⁵⁴⁾、その表現上のヴァリエーションと推測されようか。「四条の七辻」において、反橋の北側に位置する納涼床の下、川面（川底）が段状に高く表されていたのは、そうした構造を反映したものかもしれない。

⑤ 「四条の七辻」の周辺

これまでの観察と考察から、『都名所百景』「四条の七辻」は四条堀川の情景を描いたものと推定される。しかし、ディスプレイションで確認した主要な景物（モチーフ）のうち、鳥居付設の建物「七石大明神」の同定が難しい⁽⁵⁵⁾。いま筆者の眼がおよぶ種類の京都図、地誌類、名所案内記類において、四条堀川の北西角にそれらしき対象を見出すことはできない。

やや視野を広げ、堀川通のひと筋西側、岩上通を四条から北上



図 18 七石大明神（武信稲荷神社内）

すると中山神社がある。この神社は、かつて岩上神社／石上神社⁽⁵⁶⁾とも呼ばれ、「増補再板京大絵図」では「岩神」、「都名所図会」には「石神社」⁽⁵⁷⁾として載り、四条堀川近辺に所在することに加え、「岩／石」の親近性が眼につく。また『雍州府志』には「婦人乳汁を通ずるの誓ありと。故に、幼稚を養育するの女子、特にこの社に詣す。板面、乳汁洋溢の体を画きて、これをもって絵馬に代へて神前に掲ぐ」⁽⁵⁸⁾とあり、板面／絵馬が眼にとまる「七石大明神」を彷彿とさせる。しかしながら、現時点で「七石大明神」に直結する由緒を見出すことはできない⁽⁵⁹⁾。

中山神社から岩上通を北上し、六角通を左折して西へ約四〇〇メートル進むと、六角通の北側に武信稲荷神社が所在する。ここに、数少ない手がかりがあった。境内社のうち、南末社三社のひとつとして「七石大明神」が祀られているのである（図 18）。現在、この末社が勧請された事情は詳らかではない⁽⁶⁰⁾。しかし、この地に末社として祀られていることは、社地や周辺地域にまつわる信仰の痕跡とみられ、本稿にとって極めて重要である。境内の南側に祀られ、南方（四条通の方角）を向いて拝す祠の配置も、あるいは原所在地を反

映しているかもしれない。少なくとも「四条の七辻」の要件である四条通沿いでは、四条河原（界隈）や他の地点ではなく、四条堀川の周辺に所在した可能性を示す、貴重な手がかりといえよう。

眼を転じて、四条堀川を北上すると、三条をこえて程なく二条城へいたる。近世初期、二条城付近の堀川には棧敷が設けられ、行粧見物の場を呈していた⁽⁶²⁾。就中、抛るべき視覚イメージとしては、後水尾天皇の二条城行幸とともに洛中洛外諸本に描き込まれた堀川の情景が思い起こされよう。『都名所百景』にも、雪景の「二条堀川橋」（玉園画）が描かれており、堀川はそれ自体が名所的性格を付帯する、といつてよい。また二条城付近の堀川護岸には、二条城の築城にともなつて築かれたという石垣が現存する。その延長に位置する四条堀川、すなわち「四条の七辻」は、本稿で意味的なイメージソースと位置づけた江戸の名所「筋違八ツ小路」が、江戸城の外濠に相当する神田川沿いの要所であつたことに一脈通じようか。

四条堀川の西方へ眼を向けよう。本稿では、前提として「四条の七辻」を四条通沿いの市中の景観と想定し、西は壬生界隈までを視野に入れつつ、考察を進めるなかで四条堀川に焦点を絞つた。しかし『都名所百景』の制作時期を勘案すると、さらに西方にも触れておくべき事柄が眼にとまる。西高瀬川である。直接的には、「西高瀬紙屋川水門」が百景に含まれていることも、西高瀬川の整備とそれにもなう景観変化に対する関心が大きかつたことを示していよう。いま開削の事情を仔細に確認する紙幅はないが、

文久三年(一八六三)頃には開削が進み、前掲の「改正京町御絵図細見大成」では、千本通沿いの水路の傍らに「西高瀬舟入」と記されている。なおこの場所を含め、付近には西高瀬川(四条川)と垂直に接する水路を数カ所見出せるが、七つの路に接する景観構造ではない。

北に二条城、南下すれば本圀寺から本願寺(西本願寺)、東は鴨川・四条河原を経て祇園社へ通じる四条堀川において、西側の水運発達は、元来、交通の要所であったとみられるこの地点の活性や、人々の往来を一層促しただろう。また西高瀬川の開削は、ウォーターフロントとしてのイメージを増幅させる一因ともなる。

翻って、「増補再板京大絵図」に「七門」として表された特性が、継続的に認識されていたのか定かではない。この絵図が相対的に縮尺の大きな画面であったことにより、技術的に示しえた可能性も無くはないだろう。しかし他の京都図においても、記載しようとする意図があつたならば何らかの手立てが模索されそうである。

そこで少し視点を変えると、刊行された時期と京都における大火の関係が留意される。例えば林吉永版京大絵図について、山近博義氏は三つのタイプに分類している。⁽⁶⁴⁾それに従えば、タイプ1は貞享三年(一六八六)の「新撰増補京大絵図」とその修正版、タイプ2は正徳四年・享保二年(一七一四・一七)頃の刊行と推定される「新撰増補京大絵図」とその修正版。そしてタイプ3が、「七門」を記載した寛保元年(一七四一)刊の「増補再板京大絵図」

(乾坤二鋪)とその修正版である。各タイプの最初の版を基準とすると、タイプ1とタイプ2の間には、宝永五年(一七〇八)の「宝永の大火」、タイプ2とタイプ3の間には享保十五年(一七三〇)の「西陣焼け」があつた。大局的には、京の都市景観に変化が生じたことは、京都図の大幅な改版の契機として作用するかもしれない。なお本論の射程である四条堀川に関しては、前記の二つの火難において、直接的な被災は免れたようである。⁽⁶⁵⁾こうした状況のなかで、あるいは罹災域の復興過程で、四条堀川がそれまでとは異なる役割や位置づけを帯び、図示された可能性を考えておきたい。

ともあれタイプ3の「増補再板京大絵図」には、四条堀川の位置に「七門」が図示された。しかし、その刊行後、天明八年(一七八八)には「天明の大火」があり、四条堀川もその被災範囲に含まれる。⁽⁶⁶⁾さらに『都名所百景』の制作時期に前後して、元治元年(一八六四)には「元治の京都大火」(ごんごん焼け)に遭う。その被災範囲の西限は概ね堀川に沿うとみられ、四条堀川はそのライン上に位置する。⁽⁶⁷⁾したがって『都名所百景』の「四条の七辻」と「増補再板京大絵図」に図示された「七門」は、同じ地点ではあるが、同じ景観ではない。むしろ「四条の七辻」を描いた玉園が(選定者を別に想定するならその人物が)、「七門」として認識された四条堀川の在りようを知っていた可能性、あるいは直接的に「増補再板京大絵図」を眼にした可能性は無しとしない。

総じて、幕末に京の名所として選定され、描かれた「四条の七辻」

は、かつて「七門」と認識された四条堀川の景観構造が、周辺の状況変化とともに（再び）クローズアップされ、人口に膾炙していた京の名所「四条河原夕涼」や、江戸の名所「八ッ小路」をイメージソースとして成った、極めて構築的な名所観／名所絵といえるだろう。

おわりに

いまはなき京の名所、「四条の七辻」。この名所は、かつて四条堀川に存在した。それは風光明媚な景勝地、著名な寺社や祭祀、古跡・霊跡の類ではない。⁽⁶⁸⁾近世京都の市中に、人工河川と街路によってかたちづけられた特徴的な景観構造であった。なおこのことは、「四条の七辻」のディスプレイションと「増補再板京大絵図」に図示された「七門」という二つの根拠のみでも、一応の説明は可能である。ただそうした構造把握や地点同定にとどまるならば、名所に臨む情趣を欠き、感慨に乏しい。「四条の七辻」は、その特徴的な景観構造とあわせ、夕景、水辺で涼をとる人々、各所へ向かい往来する人々などが、総じて名所としての情景を表象していることを看過すべきではない。

論中でも触れたように、従前、『都名所百景』には既存の作品を範とする例が指摘されていた。本稿でも「四条の七辻」に幾つかのイメージソースを見出したが、とくに注目されるのは、京内外の他の名所・要所に結びつくファクターが潜在している点であ

る。一方、「増補再板京大絵図」に図示された「七門」は、唯一、四条堀川の情報として特記された先行資料であった。しかし「四条の七辻」が描かれた年代との時差、周辺域の来歴を勘案すれば、同質の景観を表象したものとはいえない。また諸種の地誌、名所案内記、名所図会などに、「四条の七辻」を示す情報が見出せないことも留意されよう。

転じてこれらことは、「四条の七辻」が新名所のような位置づけで選定され、描かれた可能性を推察させる。先進的な話題を発信しようとするマスメディア的な姿勢といえようか。既刊の情報を把握し、傾向や需要を分析し、世情に応じたスポットを紹介しようとする態度。概して『都名所百景』にはそのような感覚が随所に看取されるが、「四条の七辻」はその象徴的な一景といえようである。

キーワード… 四条の七辻、都名所百景（都百景）、名所、京都、空間表現

〈註〉

- (1) 万延元年（一八六〇）または文久三年（一八六三）頃から慶応元年（一八六五）頃の制作と推定されている彩色木版画の組物作品。百景に前後半の目録二枚を加えた一〇二枚組。石和（大坂の版元）刊行。携わった絵師は、梅川東居・歌川北水・川部玉園・歌川国貞・四方春翠の五名。前半目録には『都名所百景』、後半目録には『都百景』とあり、いずれの呼称も用いられるが、本稿では佛教大学附属図書館の所蔵情報に従い『都

名所百景」と記す。主な参考文献／先行研究は、中川邦昭『彩色木版画集 都百景』（京都新聞社、一九九四年）、同書収載の赤井達郎「京名所の絵―『京童』から『都百景』へ―」。また大塚活美「描かれた幕末の京都―『都百景』の制作と構成について―」（『アート・リサーチ』一一号、二〇一一年）が参照される。本稿では、本作品の全体的な位置づけについては基本的にそれらに依拠する。なお佛教大学附属図書館所蔵の『都名所百景』は写真家であった中川邦昭氏の旧蔵になり、二〇〇二年に寄贈されたものである。

- (2) 「名所」の語義については鈴木廣之「名所風俗図」（『日本の美術』第四九一号）至文堂、二〇〇七年）を参照。このほか「名所観」の多様性については、例えば長谷川獎悟「近世上方における名所と風景―秋里籬島編『都名所図会』・『撰津名所図会』を中心に―」（『人文地理』第六四巻第一号、二〇二一年）などを参照、本稿は「附記」に示した起稿の経緯にともない、同氏による一連の名所研究に地理学的観点を得ている。

- (3) 「附記」参照。

- (4) パノフスキーが確立した美術史の方法論。美術作品の「形（フォーム）」に配置される「主題・意味」を扱うイコノグラフィ（図像学）に対し、イコノロジー（図像解釈学）は作品の「内的意味・内容」の解釈をめざす（参照：E・パノフスキー「浅野徹ほか訳」『イコノロジー研究（上・下）』（ちくま学芸文庫）二〇〇二年）。

- (5) 佛教大学宗教文化ミュージアム平成三〇年度秋期特別展「徳器の成就に努めて智光を常照す―佛教大学附属図書館所蔵品展」（会期：平成三〇年一〇月二七日～一二月八日）。

- (6) なお「仏教・浄土宗」と「京都」は密接に結びつくテーマであり、いずれのテーマにも該当する資料がある。例えば、近世洛中の浄土宗寺院を収録した『浄家寺鑑』はその顕著な事例（参照：拙稿「浄家寺鑑」覚書―浄土宗寺院伝来の仏像調査に向けて―）『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第一五号、二〇一九年）。また、多くの寺院が京の名所とし

て認識されるように、この二つのテーマは展覧会の全体観を大きく分断しない。

- (7) 「佛教大学図書館デジタルコレクション 佛教大学図書館所蔵・貴重書等アーカイブ」(<https://birdbukkyo-u.ac.jp/collections/>)。

- (8) 替地とは土地を交換することをいい、近世では当事者双方の合意により宅地・田畑を交換することが様々なレベルで行われた。本例は知恩院門前の替地にかかる、寛文六（丙午）年七月十一日付の文書。

- (9) 元禄二年（一六八九）に経蔵として建立。平成二二年（二〇一〇）の法然上人八百年忌記念事業における大修理を経て、現在は納骨堂となっている（現地駒札）。『日本歴史地名大系』によれば寄進札が遺されているという。

- (10) 安政五年（一七七六）に堂舎・庫裏・僧房が焼失（『続史愚抄』巻八十）、のち寛永から文化頃の再興（『京都坊目誌』『日本歴史地名大系』）を経た景観とみられる。なお『坊目誌』によれば、山門の建立は『都名所百景』の制作に近い万延元年（一八六〇）。山門建立以後の景観であれば、山門が構図に入りそうな気もするが描かれていない。あるいは当時、元禄二年（一六八九）建立の経蔵が最も古い建造物であったとすれば、経蔵を大きく捉えた構図も腑に落ちる。

- (11) 前掲（註1）大塚（二〇一〇）。

- (12) 『都名所図会』『紫雲山金戒光明寺黒谷』では「鑑池、鑑掛松は、熊谷次郎直実上人の教に帰入し、着せし鑑を此池水にて洗ひ松に懸置しとなり」という。なお現在、古樹は枯れ三代目の松が植えられている（現地駒札）。場所に意味付けがなされているところに、「名所」としての在りかたがうかがえる。

- (13) 建久三年二月五日付の書状。直実が法然のもとに赴いたのは建久四年（一一九三）頃とみられており、その直前の動向や心情を示す。

- (14) 近景・中景・遠景の用語について、論旨によっては異なる絵の構図を比較して用いられることもあるが（参照：長谷川獎悟「都名所図会」にみ

- る18世紀京都の名所空間とその表象」『人文地理』第六二巻第四号、二〇一〇)、本稿では同一画面内の遠近を相対的に捉えて用いる。
- (15) この参考地図には、同展覧会で展示した「洛中洛外図屏風(佛大本)」に描かれた地点と合わせてプロットし、『都名所百景』に描かれた地点との比較を試みた。会場ではパネルにて掲示、また同展覧会の図録にも掲載している。
- (16) 前掲(註1) 中川(一九九四)。
- (17) 前掲(註1) 大塚(二〇一一) および(註7)。立命館大学アトリサーチセンターが公開しているARCコレクションデータベース「日本の木版画」(<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/e/database/>)など。
- (18) 名称自体は本稿の論旨に大きく影響しないが、本稿の結論的に「四条新七辻」と読んでも意味は通る。なお後半目録には「四条七辻」と記す。
- (19) 前掲(註1) 大塚(二〇一一)では「この作品は、『宇治川兩岸一覽』の「米漸」、『田原川橋』其一・其二による」ことを指摘している。
- (20) 『佛教大学図書館デジタルコレクション 佛教大学図書館所蔵・貴重書等アーカイブ レッピン』(<https://birdbukyo-u.ac.jp/collections/mapping/>)。
- (21) 例えば武田恒夫「金地構成にみる基本問題」(『美学』第一五巻第三号、一九六四年)では金地への展開を論じるなかで金雲の特性が述べられている。
- (22) 『都名所百景』のなかでは相対的に玉園担当分に多用されている感があり、そのような絵師個人の好みや傾向を捉えることも、論旨によっては有益かもしれない。
- (23) 若杉準治「鎌倉時代の絵巻の特色―画面構成の観点から―」(京都国立博物館『編』『絵巻』京都国立博物館、一九八八年)などを参照。
- (24) 多くは地藏尊を祀る祠(参照: 竹内泰・布野修司「京都における地藏の配置に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』第五二〇号、一九九九年/竹内泰・牧紀男「京都における地藏の配置変化とその要因に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』第七六四号、二〇一九年)。
- (25) 現在よく眼にする絵馬よりも大きいサイズの絵馬。例えば「室町時代以降には大形絵馬も作られた。画題は馬図をはじめ、武者絵・歌仙絵・芸能・船・生業・風俗・動物などあり、専門絵師が描いたのも多く存している、鑑賞画としての一面をもち、それらを掲げた絵馬堂は画廊としての性格をもった」(『国史大辞典』「絵馬」項より抜粋)という絵馬のイメージか。
- (26) 例えば、京街道と伊勢街道の合流地点にあたる奈良豆比古神社の高札場など。
- (27) 「洛中洛外図屏風(佛大本)」、『日本歴史地名大系』「四条大橋、川嶋將生」記念講演 四条河原の歴史的環境」(『表象芸術2003―アジアの歌と舞い―』日本学術会議芸術学研究連絡委員会、二〇〇四年)。
- (28) 鈴木康久「京都 鴨川納涼床」の変遷に関する研究―江戸期の「名所案内記」、「紀行文」、「絵画」から―(『京都産業大学論集 人文科学系列』第五一号、二〇一八年)。
- (29) 「国立国会図書館デジタルコレクション」より公開(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1303496>)。なお中山道広重美術館の資料情報(http://imaps.nc.jp/hiroshige/detail?data_id=185)によれば、版元は栄川堂(川口屋正蔵)、発行・制作時期は天保五年(一八三四)頃。
- (30) 国際日本文化研究センター「平安京都名所図会データベース」より公開(https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/page7/km_01_068.html)。
- (31) 日中の情景として表されている雲形/霞に濃色は施されていない。例えば「四条河原夕涼之鉢」の次の挿絵「建仁寺」と比較すれば、表現の差が看取される。
- (32) 鴨川護岸の表現については、吉越昭久「名所図会類にみる河川景観―近世の京都、鴨川を中心に―」(『奈良大学紀要』第二二号、一九九三年)が参照される。
- (33) 日常的な会話のレベルで「四条」という語が(「烏丸」)河原町(「木屋町」先斗町)鴨川・四条大橋の範囲の繁華街を指す場合がある。

- (34) 例えば、大石昌史「見立ての詩学―擬えと転用の弁証法―」(『哲学』第一三五号、三田哲学会、二〇一五年)などを参照。
- (35) 『江戸名所図会』「筋違橋」解説に「須田町より下谷への出口にして、神田川に架す。御門ありて、このところにも御高札を建てたる。この前の大路を八ツ小路の辻と字す」と記される。現在の東京都千代田区神田須田町一丁目付近。なお現地の案内板「御成道(筋違門跡)」「千代田区設置」によれば「筋違門の名は、日本橋から出発して、本郷・板橋に向かう中山道と御成道が筋違に交差していたためです。門内には火除けの広小路があり八つの口に通じていたため、俗に「八ツ小路」と呼ばれていました」という。
- (36) 「国立国会図書館デジタルコレクション」より公開 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2563380/56>)。
- (37) 「国立国会図書館デジタルコレクション」より公開 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1312245>)。
- (38) 田中悠文「京都における地藏菩薩信仰をめぐる―「伝統の創造」に関する一事例―」(『現代密教』第二号、二〇一〇年)。
- (39) 『京都坊目誌』首巻之五(『新修 京都叢書』第一七巻、臨川書店、一九六七年)。
- (40) 京都大学附属図書館所蔵、大塚隆「編・解説」『慶長・昭和京都地図集成』(柏書房、一九九九年)掲載。本稿に掲載した西尾市岩瀬文庫所蔵資料は「西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース」より公開 (<https://trc.adac.ac.jp/co.jp/html/ImageView/2321315100/2321315100100010/903-070-00-01/>)。
- (41) 国際日本文化研究センター「平安京都市名所図会データベース」より公開 (https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/page7/km_01_063.html)。
- (42) 『日本歴史地名大系』「中川」項。
- (43) 京都市「編」『京都の歴史4 桃山の開花』(学芸書林、一九六九年)「第一章 京都と天下統一 第4節 町衆生活の基盤」。
- (44) 『日本歴史地名大系』「堀川」項。
- (45) 前掲(註40)。河道を示す線は直結、水の色は接点を塗り残している。
- (46) 前掲(註40) 大塚(一九九九)。「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」より公開 (<https://mdakuih.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000127>)。
- (47) 前掲(註40) 大塚(一九九九)。「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」より公開 (<https://mdakuih.kyoto-u.ac.jp/item/rb00020079>)。
- (48) 前掲(註40) 大塚(一九九九)。「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」より公開 (<https://mdakuih.kyoto-u.ac.jp/item/rb00020080>)。
- (49) 「国立国会図書館デジタルコレクション」より公開 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286223>)。
- (50) 山近博義「林吉永版京大絵図の特徴とその変化」(金田章裕「編」『平安京―京都都市図と都市構造』京都大学学術出版会、二〇〇七年)。
- (51) 京都大学附属図書館所蔵、前掲(註40) 大塚(一九九九)掲載。また本稿に掲載した佛教大学附属図書館所蔵資料(宝暦一〇〇〇明和元年(一七六〇―一七六四)頃の修正版と推定)は「佛教大学図書館デジタルコレクション」佛教大学図書館所蔵・貴重書等アーカイブにおいて学内限定で公開されている。
- (52) 東堀川小路と西堀川小路(参照:『国史大辞典』「堀川」項)。
- (53) 例えば「天明六年京都洛中洛外絵図」、前掲(註40) 大塚(一九九九)掲載。
- (54) 前掲(註44)には「水が比較的少量であったとはいえ、農業用水としても重要で、上流から下流にかけて冷泉・錦小路・四条・高辻・醒ヶ井の各井堰があり、洛中洛外農村の分水に大きな影響を与えた」という。
- (55) 「七石大明神」の語は、「加茂七石」(参照:今江秀史「文化財に指定等された庭の修理に伴う加茂七石の補填の検討」『京都市文化財保護課研究紀要』第二号、二〇一九年)や、日蓮宗にまつわる「七面大明神」なども想起される。本稿では別の観点を示すが、何らかの結びつきがある可能性は否定できない。
- (56) 『日本歴史地名大系』「中山神社」項。
- (57) 国際日本文化研究センター「平安京都市名所図会データベース」より公

開 (https://www.nichibun.ac.jp/meisyozone/kyoto/page7/km_01_123.html)。

(58) 『雍州府志』卷二神社門上「石上」明神。本文中の引用は立川美彦【編】『訓読 雍州府志』（臨川書店、一九九七年）、七二頁。

(59) 現在は町内の方々によって管理されている。令和二年（二〇二〇）一月二三日に行われたお火焚きの際、現総代ほかの方々より聞き取りを実施。現時点で伝わる由緒は「岩上宮敍記」（昭和八年五月十六日大修理記念第三版印刷）に記されている。

(60) 令和二年（二〇二〇）一月二日、宮司様より聞き取りを実施。

(61) 『国史大辞典』「末社」項。

(62) 前掲（註44）。

(63) 寺尾宏二「西高瀬川考」（『経済経営論叢』第八卷第二号、京都産業大学経済経営学会、一九七三年）。

(64) 前掲（註50）。

(65) 伊東宗裕「京都の火災図京都市歴史資料館蔵大塚コレクションについて」（『京都歴史災害研究』第九号、二〇〇八年）。股座真実子・谷端郷「宝永京都大火当日に何が起ったか―火災図と文献資料に基づく被災実態の復原―」（『歴史都市防災論文集』第六号、二〇二二年）。

(66) 塚本章宏・中村琢巳「歴史的建造物の被災履歴と火災図を統合した「天明の京都大火」被災範囲の復原」（『歴史都市防災論文集』第五号、二〇二一年）。

(67) 長尾泰源・谷端郷・麻生将「火災図を用いた「元治の京都大火」被災範囲の復原」（『歴史都市防災論文集』第六号、二〇二二年）。

(68) 名所を分類する基準は慎重に検討する必要があるが、例えば前掲（註2）長谷川（二〇一二）では「寺社・古跡・祭礼・風俗・産業・風景・遊樂地・その他」に分類している。

[附記]

本稿に掲載した図版の大部分は、キャプションに示した各機関の許可および提供を受けたものである。各機関および担当者の皆様に謝意を表したい。

なお本稿は平成三一年度文部科学省科学研究費基盤研究C（課題番号：19K01193）「視覚資料の空間表現に関わる歴史地理学と東洋美術史の学際的研究」（研究代表：長谷川獎悟）による成果の一部である。